

JR東労組の東北3地本（仙台・盛岡・秋田）が、臨時大会の開催と新体制確立による組織の立て直しを本部へ要求していることは既報のとおりだが（民主化闘争情報No.980）、3月5日、大宮地本も同様の主張（方針）を決定したことが明らかになった。大宮地本は、「第11回執行委員会」名で、『悩みと苦しみの中で日々奮闘する、大宮地本全組合員のみなさんへ』を発し、ホームページにアップした。

反本部でも、エリア・地本によって対応はバラバラ！

大宮地本も「臨時大会開催」「新体制確立」を要求！

～組織丸ごと脱退か、本部責任追及の臨時大会開催要請か～

上述の大宮地本の発信文書では、『17春闘で確立したストライキ権を含めた「あらゆる戦術」を行使してたたかい抜く事を組織で確認し、職場からたたかいを創り出してきました。しかし、そのたたかいで、情勢把握や組織的力量の不足から、結成以来31年で経験したことがない大量の脱退者を生み出してしまいました。職場は疑心暗鬼になり、これまで創り出してきた安全第一で仲間を大切にする職場風土が壊されようとする現状を生み出してしまいました。』と綴っている。職場からのたたかいを創ったと言うが、多くの関係者が「今更何を・・・」と受け取っているだろう。交通運輸産業の中でもトップ水準の賃金・労働条件を誇る会社で、ベアが実施される場合の「賃金原資の配分方式」ばかりをクローズアップして「格差ベア」だと喧伝し、スト権確立・行使の目的としたこと自体が、社会はおろか、そもそも組合員の理解を全く得られていなかったということではないのか。組合員の声や感情に無頓着な、組合員不在の運動を展開してきたわけであり「組織的力量」云々といった問題ではなかろう。同文書の第2段落では、『この間わずか3か月弱であり、時間がない中でこれだけの闘いを創るにあたり、丁寧な議論を組合員と十分おこなえず、不信感を生み出してしまいました。大変申し訳なく、反省をしています。』との反省の弁に加え、職場で生まれている‘不信感’、疑念の声、戦術委員長会議が紛糾した様子を綴っている。

新潟地本では、新潟支部がJR東労組から脱退する方針を決定・周知 ～他も続く？

春闘の回答指定日である3月14日を目前にして、各地で組織・個人脱退や‘反本部’の動きが加速しているが、もはや収束不能だろう。革マル派創設時の副議長である松寄明元JR東労組会長（故人）の教えの解釈と実践を巡り、組織内の蠢きは‘嵐’の状態か。「今のままでは、組織の維持・温存はもはや不可能ではないか、だから新体制・新組織にして一定数を確保、今ならまだ間に合う！？」内心が見えるようだ。‘反本部’なのか、組織生き残りを画策した、役割分担コミの戦術転換なのか。JR革マルは、いかなる形で‘偽装’‘潜り込み’を凶るのか。組織の維持・温存のためには、目を疑うような‘コペルニクスの転回’もお手のもの。歴史は繰り返す・・・。

脱退者、良識ある組合員の皆さん、冷静に、客観的に見て行動しよう！